『現代民俗学研究』第 4 号（2012 年 5 月）
Journal of Living Folklore 4（May 2012）

「お供え」と「蔭膳」

―不在者との共食―

佐々木　陽　子 *
SASAKI Yoko

O-sonae and Kagezen

Sharing Food with Absent People

The objective of this paper is to explore the meaning contained in the apparently irrational act of preparing food that will never be consumed by the persons for which it is intended, based on a survey of the views of 75 persons with regard to the acts of *kagezen* (a tray of food for temporarily absent people) and *o-sonae* (an offering to the dead—people who will never return). The study revealed that *kagezen*, which is thought to have been a custom related to war, is still practiced, and that *o-sonae* functions as a mechanism for sharing food with closely related deceased and conversing with them. *O-sonae* appears to be used by the living as a means of expressing the thought that they will not forget closely related deceased. The institutionalization of *o-sonae* also appears to help the living to avoid nihilistic thoughts by furnishing a peaceful image of the deceased and encouraging them to believe in the happiness of the deceased in the next world.

キーワード：お供え　蔭膳　調査　安寧な死者像　共食

はじめに

本稿のねらいは、食されることのない飲食物を死者に日々供える「お供え」という不合理にも映る行為が、今日もなお生き続けていることに着目し、その有り様を調査により探ることで、こうした行為の意味を考察することにある。「お供え」と行為の外観が似たものに「蔭膳」がある。共に食されることのない飲食物（水、お茶、ご飯など）を不在者に供える行為を指すが、以下の点で両者は差異化される。1 つは、「お供え」が永遠の不在者である死者を対象とするのに対し、「蔭膳」[(1)] は一時的不在者である生者（家人など）を対象とするため、行為の対象を異にする点

* 鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科

Copyright © 2012 by The Society of Living Folklore

である。いま 1 つは、「蔭膳」には不在の生者の無事な生還を願う呪法が込められうるが、死者を対象とする「お供え」では生還を願う呪法は成立しえないとの呪法をめぐる関係を異にする点である。上述のように、「蔭膳」では「蔭膳」をすることによって、その対象者が生還するとの御利益が期待されているが、「お供え」では「お供え」の対象者である死者の生還が期待できないゆえに、一体何のために「お供え」をするのであろうかとの疑問が生じよう。この意味で「お供え」の孕む不合理性は、「蔭膳」より深いと捉えられよう。本稿では、主として不合理性をより孕むと考えられる「お供え」の意味の考察を目的とするが、「蔭膳」にも言及する。というのは、「蔭膳」に光を当てることで、両者の行為の外観の類似性や両者の関係性の揺らぎの考察が可能となり、「お供え」の内実がより照らし出せると考えるためである。

本調査は、75 名の調査協力者を対象に、質問票を用いた調査を主としながらも、一部については聞き取り調査 (2) をも実施している。また、「お供え」「蔭膳」を「やっている」あるいは「やっていた」と自覚している人々のみを対象とした質的調査に該当する。調査の主たる目的は、「お供え」や「蔭膳」をしている人々の記述や語りから、行為に託された思いを考察することにある。親密圏としての家庭内のプライベートな日常的行為とみなされる「お供え」は、その習慣化ゆえに、自明なものあるいは形式的なものとのレッテルが貼られ、その研究意義に疑義が呈せられるのかもしれない。行為が習慣化しているといわれると、その内実のなさが連想されがちであろう。だが、実は習慣化するほどに死者の空間が確保され、むしろ行為を自然であると捉えるあり様が、この度の調査から見えてきた。高齢の調査協力者が発していた「声かけしながらお供えしている」「いつの間にか会話している」との言葉は、死者との会話の自然さを語っていよう。「習慣化している」といいながら、死者の好物を用意したり、寒い日には温かい食べ物を供えたり、その季節の一番おいしい物を「お供え物」(3) として用意する行為に、死者と生者の「共食」ともいい得るあり様が看取される。不在者が死者であれ生者であれ、あたかもそこにいるかのごとくに振る舞い、人間が生きていく上で最も基本的な食を共にする擬制的行為ともいいうる「お供え」や「蔭膳」が、今日も存続していることの意味を考えたい。

1．食を供える行為における「お供え」と「蔭膳」の位置づけ

食を供える行為の概要を示すと、表 1 のようになろう。本稿では、非日常的な葬送儀礼と関わる一回性の食ではなく、プライベートな日常的行為としての「お供え」「蔭膳」に絞り取り上げる。表 1 の区分けで示すと、本稿の扱う「主たる領域」は、最も太い枠で囲んだ部分に該当する。「主たる領域」としたのは、調査協力者の回答の中に、お彼岸やお盆などの特別の日の「お供え」、「お供え」したままにするお菓子や果物、頂き物をまず「お供え」してから食べるなどの回答も含まれているためであり、この部分は 2 番目に太い枠の部分に入る。だが、本稿は、朝になれば毎日同じように「お供え」する日常的行為の反復性ゆえに、習慣的行為として軽んじられがちな習俗行為に光を当てることを主たるねらいとする。死と食の関わりは、例えば葬送儀礼に関わる「枕飯」や「枕団子」などについては先行研究が存在するものの (4)、「お供え」については、そのものを対象とした先行研究は管見の限り見いだせない。こうした先行研究の少なさからも、置き忘れられた研究領域といえよう。ただ、「蔭膳」については、数は少ないながら先行研究が存在するので、これについては次章でとりあげる。

表 1　食を供える行為の分類

分　類　項　目	対象	行為の回数（一回性・反復性）	行為の日常性の有無
葬送儀礼 ①息の切れる際の水[5]や食物（ご飯など）	死にゆく者	一回性	非日常性
②死者がでるとすぐつくる｛早飯（ヒノメ）枕飯・枕団子など（死者の食） 忌の飯（メシ）・シニベントウなど （死者と血縁者の食い別れ）	死者 〃	一回性 〃	非日常性 〃
③食い別れ（死者と村人との集団としての食い別れ）	死者	一回性	非日常性
④野辺送り後の御馳走 （初七日・四十九日などの法事の食の詳細は省略）	死者	一回性	非日常性
お供え 特別の限定された日（お盆・命日・春秋の彼岸など）のお供え	死者	一回性	非日常性
常時お供え（果物、お菓子類などをある時間供え、時々かえる）	死者	反復性	日常性
頂き物のお供え（頂き物をまずは仏壇に供える、その後おろして家人が食べるなど一旦は供える形式を一回性としている）	死者	一回性	日常性
常時（毎日かえる）｛水・お茶など飲み物を供える ご飯や家人と同様な食事一式なども供える	死者 死者	反復性 反復性	日常性 日常性
蔭膳（基本的には米飯・食事一式なども含む）	生者	反復性	日常性

上部の葬送儀礼の区分けは、［杉浦 1975（1938）: 365-368］に依拠し作成した。地域ごとの差異も大きく、表中②については名前や観念の混同も見られると指摘されており、この意味で、分類は暫定的な域に留まっている。

また、「お供え」の場所についていえば、寺の墓をはじめとする屋外も想定できようが、本稿では家庭内に限定することにする。というのは、墓地をはじめとする屋外などでの死者への「お供え」や飲食については、よく知られている沖縄における春の清明祭での墓庭でのお供えや宴会の事例［赤嶺 2002: 12; 新谷 1995: 258 など］のみならず、海外の事例としてメキシコの「死者の日」における墓で夜通し歌い祈り飲食するなどが［佐原 2004; 2005; 吉田 1993 など］、興味深い独立したテーマになりうると考えられるからである。これについては別稿で考察する予定である。

2.「蔭膳」の先行研究の 2 つの側面

「お供え」については、民俗学事典や宗教学辞典の類にも記載が乏しく「神仏へものを供えること。またそのもの」といった定義にとどまり、先行研究にもまとまったものが存在しない。これに対し「蔭膳」についてはいくつか先行研究があり、したがって、ここでは「蔭膳」に関する先行研究を簡単に整理する。「蔭膳」の先行研究のねらいは、1 つは、地域により異なる多様な習俗の収集にあり、いま 1 つは、こうした多様な習俗行為を背後で支えていると思われる信仰基盤などを見出そうとすることにある。

まず、地域によって異なる「蔭膳」の習俗事例が、柳田國男の「影膳の話」、関敬吾の「蔭膳のこと」、桜井徳太郎の「民間信仰成立の基盤―陰膳習俗の源流―」などに登場する。習俗の差異は名称の差異としても表出している。例えば、「宛てる」が語源と推測される山形の一地域の「アテ膳」、「食べ物を念入りに、見たところおいしそうに、膳を並べることを意味する」「装う」を語源とみる山陰長門の島々の「ヨソヒ膳」や「ヨホイ膳」、正式に御膳をこしらえて、食事をすすめることを意味する「供える」と関わるとされる長州の「ソナヘ膳」、家にいる人と並べずに少し片脇の別席におく鹿児島県甑島の「ヨコノ膳」、床の間の「トコ」と同じく上等の座席を意味するとされる先島諸島の石垣島などの「トクノ膳」など、数々の呼び名がある［桜井 1963: 20; 関 1941:

73; 柳田 1962: 445-446 など］。大越公平の論考「加計呂麻島芝（奄美）におけるカゲゼン習俗とカミオガミの行事」では、他地域ではみられない「写真箱」と呼ばれる鹿児島県奄美独自の「カゲゼン」を取り上げている。写真立てが取り付けられたこの箱は、他の地域では見かけない独特なお膳で、毎日食事やお茶が据えられる食事用の道具として使用されるのみならず、引き出しには手紙や葉書きが収納されたとの記述から、不在者と留守宅にいる家人との交流の装置と位置づけられよう。だが、この習俗は太平洋戦争が盛んになった頃から始まった比較的新しい習俗で、短期間にこの地に発達したとある。

次に、こうした多様な「蔭膳」習俗に通底する常民の信仰基盤を探る先行研究に着目する。まず、大越は「不在の家族員にもシマの生活を一緒に送って貰うことにあり、『写真箱』は不在の家族員の仮りの存在を示している。当然、飢餓救済の呪的行為という狭い意味ではなく、神人共食の意味も含まれてくる。(中略)つまりカミを媒介とした不在の家族員とのつながりを示す習俗」［大越 1979: 63-64］と総括している。家族の安全などを祈るこの地の「カミオガミ」は、家族員それぞれが祭主になって祈願がなされる行事である。祈願の後に下げられた供物は写真箱にも分けられ、「カゲゼン」と「カミオガミ」が写真箱を通じて相互浸透した、と大越は捉える。桜井は、柳田の分析を評価しながらも、「陰膳を据えることによって、人々はどうして『健やかに旅を続けることが出来る』（定本､448 頁）と信じたのであろうか」との疑問がなおも残ると指摘し、この点を問題意識の核に据える。そして、「蔭膳習俗のごとき瑣末事に拘泥するのは」「蔭膳」をすれば飢えから旅人を守ることができるという思いそのものに潜む「常民社会の信仰的基盤」「民間の信仰的根拠」を解明したいからだと記す［桜井 1963: 17-18］。桜井は「蔭膳」習俗の作法に、飢餓救済の目的を超えた敬虔な信仰を看取する。例えば､伊豆諸島の利島でみられる「潮花採り」と呼ばれる航海の安全を祈る敬虔な習俗 (6) は、若者などが島を離れる出帆の朝に行われるものだが､ここに「蔭膳」と神供の関係を看て取る。殊に､潮の流れが危険な海域を生み出す地域では、船旅は生死をかけたものに位置づけられ，お祓いには常緑の 2 本の茅（ちがや）が使用され、そのうちの 1 本は神社に 1 本は家の神棚に捧げられ礼拝され、その神棚に立てかけた潮花に「蔭膳」が据えられる。こうした一連の行為において、潮花が神を招き寄せるための「オギシロ（招代)」や神降臨の「ヨリシロ（依代)」としての機能を有していると指摘している［桜井 1963: 22-23］。さらに、桜井は、異郷の地にいる旅人本人が、異郷神に旅の安否を祈念するのが本来の姿のはずなのに、それを家族がかわって行い、場所も家の神棚などへ移動して祈願するといった変容に着目する。このように、先行研究は、旅先で家人が空腹でないように祈願する呪法などに単純化した「蔭膳」解釈に疑義を呈し、神供的色彩を読み込むなど、この習俗の多重な意味合いを提示している。

上記の先行研究が取り上げた「蔭膳」では、戦争や旅と死との連関の強かった時代を反映し、家人の無事な帰還を神などを介在させて祈願するといった呪法の色合いが強くうちだされている。それゆえ、時代が下り、戦争による生命の危険や、「旅をすること」と「飢えて死ぬこと」との連結が薄れている今日、「蔭膳」が消滅しても不思議ではなかろう。だが、調査から見えてきたのは、「蔭膳」が今日も行われているとの実態である。ただ、「蔭膳」が担った無事な生還を願っての呪法の色合いが薄れ､そこに託される思いも「離れて暮らす家人が健康であること」「自分たちと共にあること」などに変容してきていることが､本調査から読みとれるように思われる。

3．調査の概要

本章では、調査の概要を紹介する。調査協力者は「お供え」あるいは「蔭膳」をした経験のある人、あるいは現在もしている人のみに限定している。基本的には調査票を用いての調査であるが、部分的に直接聞き取りを実施している。主たる質問項目は、まず「蔭膳」については、「一時的（長期であれ短期であれ）に家を離れる不在の家族に対し行われる行為をさす」との「蔭膳」の定義を示したうえで、「蔭膳」をやったことがあるか（やっているか）を調査協力者自身や家人・親族などの範囲で尋ねている。さらに、「蔭膳」を経験している場合、その中身とその人自身が「蔭膳」をどのようなものとして捉えられているかを自由記述で求めている。「お供え」については、まず「お供え」をやったことがあるか（やっているか）を調査協力者自身や家人・親族などの範囲で尋ねている。さらに「お供えを定期的にしているか不定期にしているか」「お供えの対象は誰か」「お供えの場所」「お供えの中身」などについて選択回答を中心に尋ね、「お供え」の具体的内容や思いについては自由記述で求めている。

調査協力者 75 名の性別と年齢、居住地、「お供え」の具体的中身とその対象者などを一覧の形で以下に提示する。

表 2 は、75 名の調査協力者の性別及び年齢の一覧である。調査協力者の圧倒的多数が女性で、8 割を占めている。本調査は無作為抽出した上での量的調査ではないため、この男女比が「お供え」や「蔭膳」の行為主体の性の比率に直接関係するわけではない。だが、「お供えは女のつとめ」との言葉が調査協力者の高齢女性から発せられたことを考えると、圧倒的に女性が関わっているであろうことが推測される。今後調査をさらに進めていく中で、ジェンダーの視点からの分析も課題としたい。また 60 歳以上が全体の 6 割を占め、70 歳以上も 3 割近くあり、平均年齢は 61 歳である。

表 3 は、調査協力者の居住地の一覧である。「お供え」「蔭膳」を「していた」あるいは「している」人を個別に探し出しての調査であり、地域的偏りがある。6 割が鹿児島県で、大分県・熊本県・宮崎県を含めると九州地区が全体の 7 割を占める。鹿児島県の家づくりでは仏壇があるのが当たり前との考えの下、若い夫婦の家づくりは別としても、床の間を作ると同じ感覚で仏壇の置き場所を確保しているケースが見られる。地域の変数は大きく関わると考えられるゆえに、調査範囲をむしろ狭め、例えば漁業を生業とし戦争の記憶が濃厚と考えられる点で興味深い鹿児島

表 2　調査協力者 75 名の男女別年齢構成

年齢	女性	男性
20 歳代	2	0
30 歳代	1	1
40 歳代	6	1
50 歳代	15	3
60 歳代	21	3
70 歳代	11	5
80 歳代	1	1
90 歳代	3	0
不明	1	0
計	61	14

表 3　調査協力者の居住地

都道府県	区・市町村名等（人数）	都道府県	区・市町村名等（人数）
鹿児島県（47）	鹿児島市（19）枕崎市（11）甑島（1）霧島市（6）垂水市（2）種子島（1）湧水町（1）いちき串木野市（2）志布志市（1）鹿屋市（1）市町村名不明（2）	東京都（3）	台東区（1）荒川区（2）
		青森県	黒石市（1）
		福井県	福井市（1）
宮崎県（6）	都城市（1）えびの市（1）高千穂町（3）延岡市（1）	北海道（7）	札幌市（2）網走市（5）
熊本県	芦北町（1）	兵庫県	芦屋市（1）
大分県	別府市（1）	富山県	魚津市（1）
大阪府	豊中市（2）	沖縄県	名護市（1）
埼玉県	さいたま市（1）	米国	ハワイ・ホノルル（2）

表４「お供え物」の中身（複数回答あり）

具体的なお供え物	人数
水	40
お茶	56
ご飯	55
故人の好物	44
食事一式（家人と同じ場合・簡略化した場合両方含む）	21
お菓子	44
その他（果物、その季節の珍しいもの、初物、お餅、人からの頂き物、米と酒など）	26

表５　お供えをする対象（複数回答あり）

行為者からみたお供え対象者との続柄	人数
①配偶者	20
②父母（父または母いずれかの場合も含む）	39
③祖父母（祖父または祖母いずれかの場合も含む）	31
④子ども（息子・娘）	4
⑤きょうだい（義理の関係）	8（4）
⑥おじ・おば、おい・めい	2
⑦義父母	26
⑧固有名をもたない「ご先祖様」という意識対象	53

県枕崎市などに絞りこんでの研究が、今後の課題となろう。

表４は、「お供え物」の具体的な中身の一覧である。水、お茶、ご飯が３大お供え物と言えようが、言うまでもなく、個々のケースによりその親密度に相違があろうが、調査協力者の６割近い人々が、「故人の好物を供えている」と答えている。また自由記述欄からも両者の関係の親密さがうかがえる事例が多かった。また、家人と同様な食事一式や簡略化した形での食事一式についても、３割近い人が「お供え」している。ただし、毎日との回答も相当数あるものの、命日や月命日のほかお盆やお彼岸など限定付きもみられた。

表５は、「お供え」する人からみての「お供え」の対象者との続柄の一覧である。血縁関係にある者（表中①～④と⑥、⑤の８人）が圧倒的多数を占め、義理関係（⑤の４人と⑦）の約 3.5 倍、「ご先祖様」（⑧）の約２倍に当たる。

４．調査からみえてくる「蔭膳」―過去から現在への連続―

本調査では、ほぼ４人に１人の割合で自分を含む家族が、過去や現在において「蔭膳」を経験している。「蔭膳」は戦争習俗 (7) としても知られており、出征兵士は死者となる危険性と背中合せであったため、「蔭膳」から「お供え」への越境も起こりえた。戦時の「流行習俗」ともいわれた「蔭膳」は、戦争の終結により終息へと向かい、また医療や交通の発達による旅の安全が確保されるにつれ、旅人の安全を祈願した「蔭膳」も姿を消していくと推測されても不思議ではなかろう。民俗学の先行研究では、「蔭膳」は、「旅に出ること」「餓えること」「死ぬこと」の三者連関の上に成り立っており、「旅」と「飢え」と「死」は今日では考えられないほど接近したものとして捉えられていた。したがって、旅の安全が確保され、旅と死が連結しなくなった今日、一時的不在者への「蔭膳」は衰退していくものと推測されよう。だが、調査結果から明らかになったのは、今日でも留守の家人に向けてなお「蔭膳」を行っている事例が存在していることである。この意味で、「蔭膳」を過去形に「お供え」を現在形にくくることは、この調査に関する限り妥当しない。

戦時中の「蔭膳」や戦争と直接関わらない「蔭膳」の回答が思いのほか多かったのは、調査に以下の３つの変数が関わっていることが想定されよう。３つの変数とは、第１に、調査地点の多くが地方都市であるとの調査地点の変数である。調査協力者の居住地は広範囲だが、南九州地区が全体の７割を占めている。第２に、戦争を体験し記憶しているであろう年齢層である 70 歳～

90 歳代の人が 3 割近くを占めており、平均年齢も 61 歳と高いという世代の変数である。第 3 に、調査協力者の性別が「蔭膳」や「お供え」を用意する主体となることの多い女性が、8 割以上を占めているとの性の変数である。

以下では、抜粋の形で鹿児島県枕崎市に絞って、戦争と関わる「蔭膳」と関わらない「蔭膳」の事例を紹介する。というのは、枕崎市は、1 つには本土の南端に位置し、知覧や万世といった特攻基地を控え、先の戦争では、市街地の 9 割が空襲にさらされ焦土と化したといわれるほどの「全国屈指の戦災都市」とされており［枕崎市誌編さん委員会編 1990: 277; 283］、戦争の記憶が色濃く残っている地域であると推測されるからである。いま 1 つには、漁業を生業としてきた歴史ゆえに、縁起かつぎ [8] の心性が強いと考えられることなど、「蔭膳」が行われていても不思議でないと推測されるからである。その証拠に、枕崎市の調査協力者は、戦争に関わる「蔭膳」も関わらない「蔭膳」についても、他地域より詳細に語ってくれている。1900 年代後半（明治 40 年代）に入ると、帆船から動力船への移行が始まり、その後の漁船の大型化、装備の充実により「漁に出るのは命がけ」との生命の危険性は薄らぐものの、今日でも遠洋漁業で長きにわたり海上に出る家人に向けて、留守宅では「事故はないか」「病気をしていないか」など心配に事欠かないであろう

枕崎市を対象とした調査結果には登場しないが、息子や娘が外国に留学したり滞在したりした場合、無事を祈って「蔭膳」するケースなどの回答が複数見られた。表 7 の O さん（女性 68 歳）は、

表 6　戦争と絡めての過去の記憶としての「蔭膳」―鹿児島県枕崎市の調査結果からの抜粋―

性別・年齢	記載事項
女性 91 歳 Y さん	すでに故人となっている義母が息子（私の夫）の戦争出征中に毎日蔭膳をしていた。義母は、自分たちの食事と同じものを 1 人前作って並べ、一緒に食事する感じだった。私はしなかったが。（中略）温かいごはんに蓋をすれば汗をかく [9] のは当たり前なのに…と私は思って眺めていた。義母のする蔭膳を見て、科学的ではないと思っていた。戦争がすんで負けた時、神の国だから勝つといっていたのに「だまされた」という思いが強くなり、ますます非科学的なことと思うようになった。何も信じられなくなった。
女性 92 歳 O さん	戦争に行っている人のことを生きて帰るように願って蔭膳をやった。弟や兄が海軍に行っていた間にしていた。枕崎にはアメリカの潜水艦が来ていて、船出したもののたくさんの死人が浮いていた。忘れられない。兵隊では食物が十分でないので、食物を食べさせる意味がある。歌を歌って供えたりした。配給で何もない時代だったが一心に供えた。特に戦争に行っていた弟のために。戦争は国や男たちだけのものではなかった。大変だった。「あたいたつが戦争だったな」。弟はマラリヤにかかって戻ってきた。高熱にうなされ死ぬかと思った。アメンボ [10] 8 匹煮て食べさせたら、ケロリと治ったのが夢のようだ。
女性 72 歳 H さん	蔭膳は母が戦争にいっている父のためにしていた。自分で食べるものと同じものを床の間に写真を飾ってそこに供えた。ケガをしないよう、病気にならないように、無事に帰ってくるようにという思いでしていたようだ。やるのは当然と思っていた。食糧のない時代だったが、朝・昼・晩と蔭膳をしていた。食料が不足していたからこそ戦地はなお更だろうという思いだろう。「けがをせんように」「腹はへっていないか」と声をかけながら供えていた。

表 7　現在もやっている・最近までやっていた「蔭膳」―鹿児島県枕崎市の調査結果からの抜粋―

性別・年齢	記載事項
女性 85 歳 W さん	息子が県内に 2 人いて、1 人は市内、1 人は鹿児島市にいる。同居していないので、蔭膳をやっている。昔は夫が船員だったため、夫のためにしていたが、今は同居しているのでやっていない。
女性 56 歳 S さん	若いころから世話になった私のおば（今は故人）は、夫が船員だったため、足のついたお膳にご飯（小さめなお茶碗や湯飲み使用）、汁物、煮しめ（切干大根）をのせていたのを記憶している。
女性 68 歳 O さん	現在も私は蔭膳をしている。仏壇の中の夫には生前の好物、蔭膳では息子の好物をそれぞれ添える。蔭膳とは生きている者に対し、かげで供えることだと思っている。無事を祈りながら毎日供える。「おはよう」「元気で起きた」「お母さんはご飯だけど何しているの？」とか声をかける。食卓に写真を置き、その前に果物、菓子を添え、花も飾り、朝・昼・晩にお茶をとりかえ、（離れて暮らしている）子の誕生日とか年中行事のときに作って供える。帰省した時に使う茶碗、皿によそって食べる。

亡くなった夫への「お供え」と離れて暮らしている息子への「蔭膳」の両方を同時にやっているが、こうした事例はまれである。声かけなどにしても両方に向けていると読めなくもない。現在行われている「蔭膳」では生還祈願が希薄化し、むしろ情愛の対象である家族と離れていても共にあるとの思いや健康でいてほしいとの思いが前面化し、願いの内実が変化してきている。離れて暮らす家人への思いの表出として、現在における「蔭膳」は位置づけられよう。

5．調査からみえてくる「お供え」―その実態―

生者にとって死者の記憶の装置としては、写真やお墓も存在するが、本稿が扱う「お供え」も、死者を忘却することを阻止するものといえよう。「お供え」では、仏壇の中やそばなどに写真を飾るケースが多くみられ、こうした写真が死者を記憶に留め、死者への思いを呼び起こさせることが想定されよう。「長年連れ添った配偶者を亡くした夫や妻、あるいは子どもを亡くした両親にとって、配偶者や子どもは、たとえ生物学的・臨床的には死んでいても社会的には生きていることが起こりうる」［澤井 2005: 132］との言明の延長上に、死者を記憶し続ける行為として「お供え」を位置づけることも可能であろう。

（1）「お供え」の実態と思い―鹿児島県を中心に調査結果からの抜粋―

以下では、調査協力者の 6 割を占めている鹿児島県を中心に、「お供え」の行為者の思いなどが吐露されているなど印象深い事例を、紙幅の許す限り抽出している。まず、鹿児島県の事例を 6 点示した上で、「お供え」の孕む意味を考える際に、捨てがたい事例を鹿児島県外から 2 点示している。さらに、これらの事例から考察されたことを提示する [11]。

（2）調査結果の考察

表 8 と 9 の中に示した（1）～（6）から、以下のような「お供え」の意味や機能が読み取れよう。

（1）「（習慣といいながら）行為主体の食への思い入れ」:「お供え」の中身では故人の好物、季節のもの、中にはお手製のヨモギ餅まで作るなど故人に対する思いが食に込められている。

（2）「声かけ･会話の空間」:会話といっても一方的なものにすぎないが、故人に向けて「お供え」をする際に声をかける。

（3）「意図せぬ結果としての教育的機能」: 祖父母や両親が「お供え」しているのを見て育ったため、「お供え」を当然視している。

（4）「文字通りの共食」: 一緒に食べる・分け合って食べるという共食の感覚が表出している。

（5）「死者を生者として扱う『お供えの陰膳化』など含む」: 死者にお供えをしながら、あたかも生者を対象としているといった思いが看取される。

（6）「死者を思い出すあるいは想うきっかけ」: 忘れ去っているというわけではないが、改めて故人を想うきっかけとなる。

調査結果から見えてくるのは、習慣化していると言いながら、故人の好物を用意したり、寒い時には温かい物を供えたり、牛乳などの「お供え」では栄養あるものを飲食してもらいたいとも

表 8　多様な「お供え」―鹿児島県の調査結果からの抜粋―

性別・年齢・居住地	いつ	対象	場所	中身	お供えの意味付け
①女性 90 歳 鹿児島県 垂水市 K さん	定期的にも不定期にも（ご飯は朝 1 度毎日、不定期には命日、六月灯（鹿児島の夏祭り）、盆、お彼岸、観音様の祭りの時には特別に）。	故人と先祖 (12) 祖父母、父母、義父母、夫）大きな声では言えないが (13) 夫が長男であるためその先祖にお供えをし、また自分自身の父母を一緒にお供えしている。	仏壇の中もそばも。	水・お茶・ご飯・(1) 故人の好物・お菓子類・(1) その他（季節の物や珍しいもの）。	(1) 日々、お盆に近い形でお供えをしている。1 つは宗教行事や (1) 習慣的・儀礼的なもの。しかし、供えなかったからといって悪い事があるとかはないが、生きている人の気持ちを表すための行為として供え物をする。先祖代々に言葉に形容できないが、なんらかの感情をもっているのは確かなため、毎日、お供えしている。(2) 会話をする機会を与えてくれている（供える時に仏壇に向かって語りかける）。(6) 亡き人を思い出すきっかけでもある。
②女性 76 歳 鹿児島県 鹿児島市 S さん	毎日定期的にもやっているし、不定期にもやっている（正月、誕生日は特別）朝お供えして昼ごろ下げるが、下げたものを食べることはしない。	故人を 3 組に分けている。夫、夫の両親、私の両親の 3 組。そのほか、神棚にもお供えする。小さな専用の器など使用している。	仏壇はないが、神棚のほかに、写真と戒名の書いたものや遺骨の置いてある棚のような場所、床の間の隣にお供えする。	水・お茶・ご飯・(1) 故人の好物・お菓子類・果物。(1) お正月には夫の好きだったお酒を供える。誕生日には好物だったものを供える。季節の物、例えば春ならヨモギ餅をつくるなど。	(1) 習慣的・儀礼的でもあり、また (6) 亡き人を思い出すきっかけにもなる。その他、(2) お供えするときによく声をかける「ごはんだよ」とか。不合理と言われてみると、そんな気もする。(1) 習慣化しているので、しないわけにはいかない。(2) お供えをしている場所に向かって、自然と会話的な声掛けをしている。例えば、お供えの準備ができると「ご飯だよ」とか、家に入るときには「ただいま」などと会話する。
③女性 51 歳 鹿児島県 鹿児島市 K さん	定期的（毎日）朝と夜。	故人（祖父母父母）と先祖。	仏壇の中にもそばにも。	お茶・ご飯 (1) 故人の好物・簡単な食事一式・お菓子類・(1) 家族と同様な食事･その他（いただきもの）。	(2) (4) 亡くなった親に対しては「一緒に食べよう」「お茶ですどうぞ」「ごはんです」という気持ちで供えている。御先祖（祖父母）に対しては感謝の気持ちが強い。故人の命日とお盆には 1 人分の精進料理を仏前に豪華に供えています。私の父方母方の親戚はすべて、鹿児島県南さつま市に居住しています。
④女性 77 歳 鹿児島県 枕崎市 O さん （夫は漁猟長）	定期的（毎日）朝起きたとき、夕食前の 2 回。定期にも不定期にもお供えをしている。	故人（夫）。	仏壇の中にもそばにも床の間に写真を置いている。	お茶・果物 お茶・ご飯 (1) 簡単な形での食事一式・その他。	(1) 習慣になっているのでほとんどのものはお供えしてからしか食べない。(2) (4) (5) 死者と同じにする。生きてそこにいるような感じで語りかけ、食べさせる・お供えは、死者も共に行動する生活すると思うこと。
⑤女性 68 歳 鹿児島県 枕崎市 O さん	定期的（毎日）ご飯とお茶､朝･昼・晩の 3 回、毎日ではないが命日には特別な物（赤飯など）。	故人と先祖（父母、夫）。	仏壇の中にも外にも。	ご飯とお茶は毎日（朝･昼･晩の 3 回）、毎日ではないが果物・お菓子類、(1) 命日には赤飯・煮しめ・お茶・ご飯・お菓子。	(5) 亡くなってはいるのは事実なのだが、亡くなっているとは思わず、生きている時のことを思ってお供えする。(2) 下げる時は「もろっ食ど」といいながら。何をするにも声をかけながらする。現在も両方（蔭膳もお供えも）やっている。(1) 仏壇の中の人には生前の好物や家族と同様な食事をお供えする。
⑥女性 68 歳 鹿児島県 枕崎市 Y さん	毎日（朝一番に最初のもの）。毎日ではないが定期的（ごはんをたいた時には、ご飯を必ず供える）。	故人（父）。	(5) その他心の問題なので、仏壇に置くこともあるが、食卓に置くことが多い）。	お茶・ご飯・(1) 故人の好物・お菓子。	(5) 故人は向こうの世界で生きているという思いからの家族の自然な行為だと思う。あちらでも元気でいるように、こちらの世界と心を通わせていたいなど、生きている時と同じように考えたいのだと思う。それほど家族愛が深かったのではないか。(1) 現在ほど食が豊富ではなかった時代の最大の愛情表現の 1 つが飲食だったのではないかと思う。

表９　多様な「お供え」―鹿児島県外の調査結果からの抜粋―

性別・年齢・居住地	いつ	対象	場所	中身	お供えの意味付け
①女性 63 歳 東京都 荒川区 S さん	定期にも不定期にも（朝夕は定期的に、頂き物があったとき、食べて頂きたいものがあったときなど不定期に）。	故人と先祖（夫、父母、御先祖様）。	仏壇の中、両親の写真の前。	水・お茶・ご飯・(1) 故人の好物・お菓子・その他（お盆には小さめのお膳を一式用意する）。	(3) 祖母や両親がそうしたように、あたりまえに毎日お供えしています。(6) あの人はこれが好きだったからと思いながらお供えすることもあります。(4) 一緒に食べている気持ちで「おいしいね…」とかいうふうに、(4) (5) 生きている人に対すると同様においしいものを分け合いたい、食べていただきたいという気持ちで、私はお供えしています。(1) 習慣的・儀礼的なものもあるし、(6) 亡き人を思い出すきっかけでもある。
②男性 60 歳 埼玉県 さいたま市 S さん	毎日定期的にやっている。	故人（父母）。	専用の机を仏壇代わりに使用している。その上にお供えを用意している。写真は別な場所にある。	朝のお供えは主に水・お茶・(1) (5) 牛乳など、菓子類と果実は常時お供えしている。(1) 故人の好物などは不定期にやるものの、(1) 家族と同様な食事は毎日夕食時に用意する。	私は寒村で生まれ育ちました。父母の死後は生前に何もしてあげられなかった「贖罪」の祈りを込めて、(4) 夕食時には私と同じ飲食物（お酒を含め）を供えています。民俗学のいう生者への蔭膳については知りませんでしたが、私の行為は (5) お供えではなく蔭膳ではないかと思っています。(4) 同じ飲食物を共有することで父母が現在も私と共に有るのだと感じることでなぐさめられていることはあります。その意味で、私の行為は死者のためというより、(5) 父母の死を否定することで私自身が慰められているのかもしれません。

読め、生きている人に対すると同等の思いが読み取れる。「お供え」の客体が行為主体にとって情愛の対象の場合は、一緒に食べるという文字通りの「共食」が看取される。

また、「お供え」と「蔭膳」の関係性の揺らぎについては、通常「蔭膳」は床の間や食卓、「お供え」は仏壇の中やそのそばと場所で差異化されるケースが多いが、表８の⑥の女性（鹿児島県枕崎市 68 歳）が「心の問題なので、仏壇に置くこともあるが、食卓に置くことが多い」と書いていることからもわかるように、死者への「お供え」を自分たちの食卓に並べて用意する「お供えの蔭膳化」ともいいうる現象が、調査から見えてきた。この事例は、食卓に置くことで一緒に食べるという「共食」の色合いも強くでているといえよう。

いうまでもなく調査地域は限定されたものにすぎないが、鹿児島県枕崎市のような地方都市が調査地点に含まれたことで、わずかではあるが「お供え」と「蔭膳」両者間の越境や交錯の実態の考察に示唆を得ることができたと考える。その他の地域でも、上記でとりあげた事例と同様に、「お供え」について、「故人をしのぶ心温まる時間」「飲食物を故人にお供えすることで悲しい気持ちが徐々に薄らぐ」「生きてそこにいるような感じで話しかけ、食べさせる」などの回答から、生者と死者の距離を短縮させる行為としての位置づけが垣間見られよう。表に提示してはいないが、ハワイに沖縄から戦後まもなく移住した女性の養母が、移住する際の船の中で子どもを亡くし、その後かかさず哺乳瓶とミルクを持ち歩き、旅行中も含め毎日「お供え」し続けたという。この事例は、死者との濃密な関係が 60 年もの長きにわたって継続してきた事実を語っている。

おわりに

親しい者との死別体験は苦しみや悲しみを負荷される強烈な体験であるにもかかわらず、今日の社会において「プロセスとしての死」が葬送の簡略化や短縮化[14]によって、時間秩序の回復が以前より困難をきたしているといえよう。葬儀が済めば普段の生活に戻り、自分の背負い込んだ苦悩と無関係に流れ去る時間を受け入れ、通常の時間感覚を早々に回復せねばならない。時間が停止してしまったような解体してしまったような時間変調の感覚や、自分と自分を取り巻く外界との乖離の感覚を解消し、通常の生活リズムを取り戻さねばならない。

本稿のねらいは、死者へ飲食物を供える「お供え」という不合理にも映る行為の考察を主としながらも、副次的に「蔭膳」にも光を当て、こうした習俗行為が生き続けているのはなぜかとの問題意識の下、今日の有り様を調査により探り、行為に込められているであろう意味を考察することにある。ここでは、以下の 3 点を考えたい。

第 1 に、情愛の対象である死者への「お供え」の場合、「お供え」は親しい死者を「忘れない」という記憶の装置として機能している点である。死者と共にあること、死者の記憶を反芻し、死者に話しかけ、死者に交信し続ける行為としての「お供え」は、強烈な喪失感や苦悩の後には癒しとなるかもしれない。「お供え」は残された生者から死者へ向けての一方的な交信にすぎないが、安寧な死者像が担保されることで、死が虚無の地底への転落であるといったイメージに支配されがちなニヒリズムから我々を救い出してくれるかもしれない。

第 2 に、擬似的な「共食」行為の習慣化によって、飢えることのない安寧な死者像を担保する機能を「お供え」が担っている点である。こうした安寧な死者像の「思い込み」「信じ込み」により、死者をあたかも生者のごとく扱い、「ごはんだよー」とか「いっぱい食べてー」などの語りかけを可能とするのであろう。此岸と彼岸の越境不可能性を十分認識していながら、食という生きる上で最も基本的行為を共有する擬制によって、死者もまた日々安寧でいるとの「思い込み」「信じ込み」を確認する機能が、調査結果から見えてきた。

第 3 に、「お供え」と「蔭膳」の関係については、そこに込められた思いの接近が指摘できよう。戦争が終結し旅に出ることが飢えや死に連結しなくなったことにより、「蔭膳」が従来担ってきた無事な生還の呪法などの機能が薄れることにより、むしろ「安寧でいてほしい」「一緒にいるように思いたい」などの思いが前面に出ることを考えると、両者の行為に込められた思いが接近してきていると捉えられよう。

もちろん、仏壇に食物をお供えするものの、情愛の込められた行為とはいえない事例があることも想定できる。他人としか思えない死者への「お供え」を「女のつとめ」としてさせられる嫁の立場から考えると、ジェンダーの視点からこのテーマを問いかける重要性もうなずけよう。また、「祖母や母がやっていたから…」という理由で、「お供え」を行うのを当然とみなす回答から、こうした行為が行為主体の気持ちとは別に、意図せぬ結果として子どもへ見せる行為としての「教育的」効果をもたらすとの指摘も、調査回答から読みとれる。

今回の調査では、「お供え」の対象者に情愛を抱いている調査協力者が多かったため、死者への食に思いを込め共食に近い記述が多くみられた。現代社会において、減ずることのない食を用意し続けるという行為の孕む不合理性は、了解されながらも受容される。不合理だからしないのではなく不合理でもすることの意味は、我々の中に当然のように受け入れられている合理性、す

なわち触れることのできるもの可視的なものを「存在」と捉え、触れることのできないものや不可視なものを「不存在」と捉えることを自明とみなす分節が、我々の日常世界のすべてを支配しているわけではないことを改めて語る。触れることができない不可視な死者もまた確実に「存在」し、あたかも生者のごとく扱われたりする。だが、他方で、時間の経過と共に死別体験に伴う苦しみの源泉である強烈な喪失感もまた希薄化していくであろう。十数年前に突然父親を失った調査協力者のKさんが「父の顔は思いだせるのに、その声がどうしても思い出せなくなってきた」と語った言葉が脳裏から離れない。仏壇などに置かれた写真は父親の記憶を視覚的に焼き付けるのに助けとなろう[(15)]。しかし、声を忘却しかけることは、時間がもたらす不可避的現象とみなされよう。私たちが情愛の対象の死者を「忘れない」との思いを「お供え」に託し、死者と会話し死者を身近に感じ、記憶の中に親しい死者をかけがえのない存在として生かし続けているのかもしれない。「忘却しない」「忘却したくない」との思いと裏腹に、時間と共に忘却していく現実をも背負い込んでいるこのアンビバレントな習俗行為として「お供え」を捉えた時、時間に抗しても忘却しないという意志表明と共に希薄化していく死者、忘却されていく死者の存在も予感せざるをえない。だからこそ、せめて「お供え」によって死者を身近に感じ続け生かし続ける営為とも思えてくる。「お供え」の対象である親しい死者が、手の届かないところに旅立ったという現実を受容しつつも、自分自身の中で忘却せずに生かし続けていきたいとの思いも存在し、こうした親しい死者への多様な思いの交差地点に「お供え」は位置づけうるのではないだろうか。

註

(1) 「かげぜん」の表記について民俗辞典の類では、大半が「蔭」を当てているため、本稿はこの字に統一する。ちなみに柳田國男は後述のとおり「影膳」と表記している。「かげぜん」の表記は、民俗学の先行研究において「蔭膳」「影膳」「陰膳」「カゲゼン」の4種の使用が混在しており、先行研究の紹介部分においては、その研究者が使用した表記を優先的に使うこととする。柳田國男は「影」の字に込められた思いを次のように論じている。留守宅の者には不在者がどちらを向いているともわからないが、それでも「影膳」する側の気持ちは届くものと思っていた人々は、「わざと幾重にも意味のとれる」「影」の字を当てたとして、「神の御影」のカゲ、「面影」のカゲ、「人の姿かたち」を意味するカゲ、「人の居らぬ處」や「背後」を意味するカゲなど複数の意味が提示されている［柳田 1962: 447］。

(2) この調査は2008年8月から2010年11月にかけて実施したもので、「お供え」あるいは「蔭膳」をやった経験がある、あるいは現在やっている人を探し出し、合計で75名の方々に協力を頂いた。調査票を用いた調査を主としながら、聞き取りも組み入れている。調査票については、自計式を主とするが、高齢の方々については他計式も含まれる。聞き取り調査については、調査協力者のご自宅や、同僚の場合は職場などで実施した。調査協力者は2種類に分けられ、1つは、ご自身に直接協力者になって頂いたケースであり、いま1つは、仲介役に立って頂き調査協力者を紹介頂いたケースである。前者のケースとして、鵜木史代さん、上吹越麻美さん、坂本和子さん、坂本加奈子さん、四藏幸夫さん、前田理恵さん、宮地あゆみさんにご協力をいただいた。また、後者の仲介役（ご自身が調査協力者の場合も含む）として、石川貴智さん、奥恵子さん、仮屋淳子さん、佐野正彦さん、柴木れいかさん、牧島知子さん、山崎喜久枝さんにお世話になった（氏名の表記はあいうえお順とする）。仲立ち下さった方々を含め、すべての調査協力者に心より感謝申し上げたい。プライベートな問題に質問が入りこむため、成立の難しい面もあり、

調査が成り立ちえたのは、ひとえに上記の方々のご協力によるものである。外地まで含む日本各地の広範な調査の大半は、柴木れいかさんの仲介によるものであり、また鹿児島県枕崎市の高齢の方々をも含む調査では、山崎喜久枝さんが方言を丁寧に解説下さり、多様な情報を御教示くださった。このお 2 人にはことのほかお世話になった。関東から鹿児島に移ってまだ 6 年ほどの筆者では、調査協力者を見いだすことが不可能であるばかりか、仮に見出しえたとしても、方言の理解に限界が生じたであろう。本調査は上記の方々から御助力を頂けなければ成り立ちえないものである。ここにお名前を記すことで謝辞にかえさせて頂く。

(3) 「お供え」は行為を「お供え物」はお供えされるものを指すこととして、両者を定義する。

(4) 例えば、死者がでるとすぐ作るとされる「枕飯」について、［古川 2008］では「死者の食」を強調する柳田國男説と、霊魂を肉体へ呼び戻す「魂呼ばい」と捉える井之口章次説が提示されている。それに対し、［田中 1999］では、前述の「魂呼ばい」と捉える井之口説と、死者の霊は祟りやすい荒魂のためそれを鎮める「鎮魂」の機能を唱える五来重説がとりあげられている。その他、死者と食に触れたものに、［板橋 2002; 井之口 1950; 倉田 1978; 五来 1992; 新谷 1995; 関沢 2004; 福田ほか 2006; 宮家 1980; 宮田 1999; 山口 1975（1938）など］がある。

(5) 杉浦はこう分類し解説しているが、「末期の水」の時期については死ぬ前か後かの異なる解釈があると提示するものもある［五来 1992］。

(6) この習俗については、桜井の署名入り記事でも登場する（東京新聞、昭和 38（1963）年 3 月 22 日、夕刊）。

(7) 「今回の大戦役以來、目に觸れ問題になることが急に多くなりました」とある［柳田 1962: 445］。桜井も次のように書いている。「とくに戦時中は出征軍人の留守宅で武運長久を祈願する呪法としてあまねくとりあげられた。（中略）日華事変にはじまる戦時中の陰膳習俗の盛行が、日本民俗学界の関心をよんだ」［桜井 1963: 16］。

(8) ジェンダー絡みの縁起かつぎの例として、「女性は船に乗ることは、もちろん、見送りさえもなかった。そして、漁の道具も“縁起が悪い”と言って女には触れさせなかった」といった「女性忌避する習俗」が紹介されている［枕崎市誌編さん委員会編 1990: 605; 若林 1998: 50］。逆に、船霊のエビス様が女性故に女性が尊ばれる民俗も存在している。帆船時代に船霊のエビス様を安置する特別な行事があったが、「その前日に船大工は 12 才以下の初潮をみない女子に御神体作りを指示する」［若林 1998: 49］とある。 その他、初航海の後に飲む焼酎には、必ず黒砂糖を入れた。「それは、沖での鰹の群れは、背びれの色で、『真っ黒』に見える。この『真っ黒』に会うようにという祈りをこめて、黒砂糖を使った」［枕崎市誌編さん委員会編 1990: 832］と紹介されている。

(9) 「蔭膳のお椀の蓋に露が付いていれば無事」との占いが広く行われたとある［大越 1979: 60］。

(10) 枕崎市水産商工課水産流通係および鹿児島県水産技術開発センターに問い合わせたところ、方言でいうアメイオ、アメ、アオイオという魚を指しているのではないだろうかとのお話であった。魚図鑑の名称は「くろさぎ」といい、枕崎では今でも食されスーパーでも売っているとのことであった。

(11) ここでは鹿児島県の事例が中心となっているため、考察結果の地域特殊性を否定することはできないが、本調査における他県の事例と照らしても、考察結果を 1 つの傾向として捉えることはできると考える。事例を増やすことで、より精緻な考察を今後の課題としたい。

(12) 「故人」とは表 5 でいう①～⑦を、「先祖」は⑧を示す。なお「養父母」は父母に含め、「養母の息子」は義理のきょうだいに含めている。

(13) 高齢のこの調査協力者の方は自分が長男の家に嫁に来た身なので、自分の実家の両親を嫁ぎ先

で祀ることは大きな声ではいえないことと認識している。

（14）「生と死の中間領域の縮小化が進行し、死穢忌避観念の希薄化とともに死者そのものが祟る死霊から親愛なる死者個人へと変化」していると、［関沢 2004: 178］は指摘している。

（15）［鈴木 2004］は、遺影が部屋に飾られ、残された家族の日常生活空間に位置づけられている実態を調査を通じて明らかにしている。その遺影は時には祈願対象にもなりながらも、故人を記憶し続けるメディアとして機能していることを論証している。

文献

赤嶺政信　2002「奄美・沖縄の葬送文化―その伝統と変容―」国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在―民俗の変容』吉川弘文館

板橋春夫　2002「葬送と食物―赤飯から饅頭へ―」国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在―民俗の変容』吉川弘文館

井之口章次　1950「末期の水」『民間伝承』14（10）

大越公平　1979「加計呂麻島芝（奄美）におけるカゲゼン習俗とカミオガミの行事―家族組織研究の一視点―」『南島史学』14

倉田　勇　1978「食事習慣論断章―霊魂と食事―」『人類学研究所紀要』8

五来　重　1992『葬と供養』東方出版

桜井徳太郎　1963「民間信仰成立の基盤―陰膳習俗の源流―」『日本歴史』182

佐原みどり　2004「死を笑うことば―メキシコにおける死のユーモアとジェンダー」『ククロス』1

佐原みどり　2005「死の隠喩と死生観―メキシコ・シティにおける『死者の日』を中心に―」『国際開発研究フォーラム』28

澤井　敦　2005『死と死別の社会学―社会理論からの接近―』青弓社

新谷尚紀　1995『死と人生の民俗学』曜曜社出版

杉浦健一　1975（1938）「葬送儀式」柳田國男編『山村生活の研究』国書刊行会

鈴木岩弓　2004「民俗仏教にみる『死者』への祈り―遺影を手がかりに（佛教における祈りの問題）―」『日本佛教學會年報』70

関　敬吾　1941「蔭膳のこと」『民間傳承』6（7）

関沢まゆみ　2004「行き場を失った枕飯」『現代宗教 2004』

田中宣一　1999「枕飯と枕団子―葬送儀礼における雑神への施食―」『日本常民文化紀要』20

福田　充・八木澤壮一・中澤勇二　2006「冠婚葬祭　特に葬送儀礼における飲食の多様性について―歴史性・地域慣習で生じる地方色豊かな会食形態―」『ニューフードインダストリー』48（3）

古川のり子　2008「日本神話と葬送の民俗―泣き女・枕飯―」『死生学年報 2008』

枕崎市誌編さん委員会編　1990『枕崎市誌 上巻』

宮家　準　1980『生活のなかの宗教』日本放送出版協会

宮田　登　1999『冠婚葬祭』岩波書店

柳田國男　1962「影膳の話」『定本柳田國男集 14』筑摩書房

山口貞夫　1975（1938）「食物」柳田國男編『山村生活の研究』国書刊行会

吉田敦彦　1993「死を見据える文化と子ども―メキシコ『死者の日』のフィールド調査から」『青少年問題研究』42

若林良和　1998「鹿児島県におけるカツオ漁業の展開と漁船乗組員の海上生活」『高知大学教育学部研究報告第 2 部』56